

私と郷土と文学 ⑪

大河原町から柴田町へ向かう国道四号線バイパスが、葦神山(にらがみやま)を掠めて走っている。葦神山の所在地は村田町になる。ここに「奥の細道・葦神山」という案内がある。芭蕉は元禄二年(一六八九年)旧五月四日に確かにここを通り過ぎている。

しかし、残念ながらここでは俳句を詠まなかった。後年、この芭蕉に心酔した江戸末期の大河原の俳人、村井江三(こうざん)が自費で句碑を建立したのだ。石碑に刻まれた句は「鶯の笠落としたら椿かな」江三は、この葦神山の辺りに庵を結んだといわれ、この風景を愛していたことが偲ばれる。

大河原といえば、歌人、佐藤佐太郎を忘れることができない。佐太郎には生涯の師匠がいる。蔵王連峰を挟んだ向こう側の上山、斎藤茂吉だ。蔵王の熊野岳の

頂にはその茂吉の歌碑がある。「陸奥をふたわけさまにそびえたまう蔵王の山の雲の中に立つ」

その蔵王を仰ぎ見るように佐太郎の歌碑が町内甲子公園に建つ。「生まれしより六十年か低山の上に蔵王の残雪光る」お互いの魂を呼びかけあうような短歌(うた)になっている。奥の細道の道すがら、芭蕉も何度か振り返ったであろう蔵王連峰。

村井江三も「耳順(じゅん)のとしをかえて」として詠んだ句がある。耳順とは六十歳の別称である。「花一つさけば盛りや福寿草」さて、私は当年、六十を過ぎること二歳。俳句も短歌も詠んではいけない。(鈴木正博)

陸奥をふたつに分ける蔵王連峰

「私と郷土と文学」の原稿募集約600字で会員のみさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

100万人の年賀状展終了

1月11日から2月12日まで、恒例となった新春ロビー展「100万人の年賀状展」(仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催)を開催した。今年で15回目。イラストや版画、写真、絵手紙などと

共に、思い思いの言葉をしたためた年賀状作品、641点が寄せられ、会期中約3900人の来場者で賑わった。新春の清々しさと共に、小さな紙面の中で言葉の交流を楽しんでいた参加型企画として、今後も続けていきたい。

文友の部屋

※高い木立に囲まれた、なかなか石畳の坂道があがると、青い瓦屋根の洋館が見えてくる。鎌倉文学館は、旧前田侯爵家の別邸で、手入れされた庭のむこうに海を眺めることができる。再現された中原中也の帽子や、大佛次郎の猫の置物などの愛蔵品をはじめ、鎌倉にゆかりのある文学者の著書や原稿が保存、展示されている。(小林恵子)

「文友の部屋」の原稿募集

1500字程度で、会員のみさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想など

文学の杜

仙台文学館
友の会会報

第53号

平成29年3月20日発行



とよたかずひこ
「ももんちゃんぼっぼー」

私にわたり親しい間柄だった嵐山光三郎、村上春樹、和田誠、三氏の仕事も紹介します。ひとつの時代を風のように駆け抜けた安西水丸の作品展をぜひご覧ください。

夏休み期間には、毎年多くの親子の方々に楽しんでいただいている「こども文学館えほんのひろば」を開催します。18回目となる今年のテーマは、「とよたかずひこの絵本世界」です。実は、2000年に開催した「こども文学館」の第一弾でご登場いただいたのが、とよたさんでした。あれから17年。今回の展示では、「でんしゃにのってシリーズ」「ももんちゃんシリーズ」「おいしいとちりシリーズ」「ぼかぼかおふろシリーズ」の4シリーズをとりあげる予定です。

新年度は「イラストレーター 安西水丸展」から

29年度展示 夏休みは「とよたかずひこ絵本世界」



安西水丸
Photo by Nakano Masataka

仙台文学館の今年度は、特別展「イラストレーター 安西水丸展」でスタートします。安西水丸は、70年代から長年にわたり活躍したイラストレーターです。画面の要素を出る限り削ぎ落としながらも、柔らかなユーモアに溢れる彼のイラストは、ときに優しく、ときに鋭く、見る者を魅了しました。漫画・絵本・小説・エッセイの執筆や翻訳など、枠にとらわれない多様な活動をおこなうながらも、「イラストレーター」であることへの誇りを大切にしていた安西。本展では、幼少期から晩年に至るまでの足跡を、イラストレーションの作品を軸に辿ります。また、公

9月からは、特別展「上橋菜穂子と『精霊の守り人』展」を予定しています。1996年の「精霊の守り人」からはじまった、ファンタジー小説「守り人」シリーズは現在、全10巻が刊行され、累計400万部を超えるベストセラーになっています。2016年からはNHKでドラマも放送され、ますます人気が高まる「守り人」シリーズ。展覧会では、その「守り人」シリーズを中心に、上橋さんの作品世界の魅力を紹介いたします。そのほか、イベントや講座も充実した

風と歩こう



Photo by Ryuji Sasaki

文学館は溪谷上に建っている。浮いているような、でもどっしり感がたまたよう。この言葉の杜の館から出て自然の森に入ってみる。

歩きはじめたばかりのいい所に扇畑忠雄先生の歌碑が、少し行くと富田博先生と海鋒義美先生の「春の足音」の楽譜の碑がある。周辺のアジサイはドライフラワーのようになつたまままで花をつけ、それはそれでなんとなくいい。他の茎の突端から赤芽が芽吹いている。春はそこまできてくるのだ。

半円形のベンチに腰を下ろすと立派ないい形をした黒松の樹が一本雄雄しく見えた。木々の間からは雪をかぶっている泉ヶ岳がくつきりと目にはいもつと歩いた。枯れた松葉に覆われた「赤松の道」はふかふかで気持ちがいい。湧き水ありの案内板の所で引き返した。

春はほらほらもうすぐそこまできていよとハミングしながら。(一)

◆会員情報コーナー◆

▽伊勢民夫さん著「仙台城下の商人(あきんど)群像」(国宝大崎八幡宮 仙台・江

仙台文学館友の会(仙台文学館内)
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話 022(271)3020
仙台文学館のホームページ
<http://www.sendai-lit.jp/>

内容でご用意しています。小池光の短歌講座をはじめ、短歌・俳句・川柳合同の吟行会「ことばの祭典」や「仙台朗読祭」、「仙台文学館ゼミナール2017」など目白押しです。

10月8日(日)には、日立システムズホール仙台で、こまつ座公演「円生と志ん生」を上演します。昭和を代表する落語家・三遊亭円生と古今亭志ん生が、終戦により大連から一時帰国できなくなった史実をもとに、その受難の日々を、井上ひさしが笑いをちりばめて描いた音楽劇です。ぜひご覧ください。

仙台文学館平成29年度展示予定

- ◆特別展「イラストレーター 安西水丸展」 4月28日(金)～6月25日(日)
- ◆夏休み企画「こども文学館えほんのひろば」とよたかずひこの絵本世界」 7月15日(土)～8月27日(日)
- ◆特別展「上橋菜穂子と『精霊の守り人』展」 9月16日(土)～11月26日(日)
- ◆企画展「井上ひさし資料特集展 vol.1」 7月
- ◆12月16日(土)～平成30年4月8日(日)
- ◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」 平成30年1月10日(水)～2月12日(月)

*タイトル、会期は予定です

文友一滴

学習指導要領の改定案で、小中学校の社会科から「鎖国」という言葉が消えたことと新聞に載っていた。歴史研究が進み、江戸後期には長崎、対馬、薩摩、松前の四港を窓口にオランダや中国、朝鮮、琉球等との外交関係があったと、正確な表現ではなくなったのだ。読みながら、あら、困ったなと思った。学校で習ったかどうかも忘れたというのに、意外なほど複雑な思いがあった。これまでテレビの時代劇や歴史ドラマ、クイズ番組から時代小説等「鎖国」を背景とした娯楽の分野に親しんできた。今更ちがうと言われても、おもしろいとは修正がきかない。たまたま二文字の威力の大きさに感嘆した。

思えば私は「鎖国」を都合のいいキーワードとして利用してきた。例えば、外国人を前にすると妙に動揺して平静でいられないこと。内輪の人間関係ではこのまに気配りなことに、部外者には案外鈍感なこと。一斉唱和の教授法に慣れた身では英会話のネイティブ講師の指導でも上達が遅いこと等。これはきつと「鎖国」DNAのせいにはちがいないと安易に決め込むという具合。一方では、日本人の器用さは、資源に乏しい島国でしかも「鎖国」だから必要不可欠だったとか、西欧諸国が絶賛した絵画や工芸品の芸術性は「鎖国」なればこそ熟成された等々、卑屈と高慢の両方の言い訳にできたのだ。そんな理屈は今後通用しなくなるらしい。

グローバル人材育成が緊急な課題だそうである。教科書から「鎖国」の二文字を消すことが、つまるところ世界に羽ばたく人材を輩出することにつながるかもしれない、と割り切れない片隅で思ったりした。

当面は不当な役目を負わせてきたらしい「鎖国」とどう折り合いをつけたものかと考え込んでいる。(近)

戸学叢書、648円)が出版されました。執筆途中だった遺稿を仙台市博物館スタッフがまとめたもの。伊勢さんは2015年に逝去されるまで、長年、文学館友の会会員でした。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第53号をお届けします。

▽おだやかな日で真っ青な空のもと、青葉山を歩いた。木々には葉がなく野鳥の観察がしやすい。小鳥たちの声に耳を澄ますと安らぎを感じる。やよよしくいくとカモシカの親子に遭遇。新年早々めったにない出会いに思わず小躍りした。森の空気は格別おいしかった。(一)

▽それぞれ傾向が異なる読書会にいくつか所属している。事情でこのところ欠席続きだ。後で例会の様子を知らせてもらう温かさが有り難い。欠席が長引けば迷惑かとも思いながらも、やめられないでいる。(近)

▽薬師寺東塔の修復に携わっている人たちは、千三百年前の職人と会話しているのだらう。そして、千年後の職人との出会いを信じて作業をしている。彼らが「一度だけタイムマシンに乗せてあげます」と誘われたらどうするだらう。私は「曾孫の孫に会いたい」と言えるだらうか。少し怖いけれど、せめてそれくらいは、確信を持って答えられるようにしたいものだと思う。(和)

▽文学館の池にかかる橋の上を歩いていると、水辺の石の上に白いサギが1羽、長い首をS字の形にして佇んでいた。思いがけない光景に「あつ」と声が出て立ち止まり、目は釘付け。聞けば毎年寒い時期に、時にはつがいでやって来るのだとか。高貴な姫君の雰囲気を持ったあの白い鳥、春にはいずこへ？(佐)

友の会随想

文学への愛着が芽生えたのは中学3年のころだった。夏目漱石の「吾輩は猫である」を読んだ面白かった。次に「こころ」を読んだ。前者は難しい漢語を多用した饒舌の面白さでエッセー風。後者はテーマの絞り込みと告白体の深刻さが緊張感をはらんでドラマティック。対照的な作品であり、漱石の多様な世界が文学入門になったことは幸いだった。



私の文学事始め

友の会会員 阿部 友康

高校生になってからは「草枕」「三四郎」「それから」「門」「道草」など漱石全集を次々に読んだ。高校の図書館を利用したので、ずらりと並ぶ全集の読破を思いつき、漱石以外の作家へ進んだ。坪内逍遙、二葉亭四迷、尾崎紅葉、泉鏡花、幸田露伴、樋口一葉、森鷗外、島崎藤村：といった順序で明治の文豪が並ぶ。文語、漢語、候文などがまだ顔を出し、読みにくいのに律儀な付き合ひだった。

高校から大学へと進み、川端康成、井上靖、伊藤整、三島由紀夫、大江健三郎ら昭和以降の作家や欧米の作家にも親しむようになった。時代が進むにつれ、用語や表現方法も内容も多様になる。けれども、読み始めの印象が強かったせいか、私の頭脳は明治の文学に染まり、多大な影響を受けた。歴史を含めて明治への興味はいまだに尽きない。あらゆる

面現代日本の源流は明治にあったと思ふからだ。文明開化の欧化主義、経済・軍事優先の富国強兵。敗戦までの軍国主義も日清・日露戦争の延長だった。文学においても、現代文学の源流は明治であろう。特に漱石と子規はとも大きな存在だ。2人は大学の同期で親友。今年と共に生誕百五十年に当たる。新しい文学も芥川賞作品は読むよう心がけているが、老化現象の進んだ今では現代の作家に付いて行けなくなった。読書に対する集中力や根気が衰えたせいもあるが、楽しめないのだ。その点、明治の作家は安心して読める。中でも漱石、子規を読み直すのは楽しい。われながら化石のような古さを笑うしかない。

作家の姿が見えてくる 井上ひさし資料特別展 Vol. 6

「ドラマ・ウイズ・ミュージック」井上ひさしの音楽世界が4月9日まで開催されている。音楽との出会いから「組曲虐殺」までの、井上ひさしの歴史を辿ることが出来る。井上ひさし資料特集展シリーズで毎回驚かされるのは、作家の妥協を知らない追求の姿勢だ。どこをどう切り取っても、とことんこだわる井上ひさしが現れる。塗りつぶされた原稿、資料への書き込み、その一つ一つが作品となっていく。私た

ちは、展示を通して、その過程をドラマチックに追体験することができる。プロードウェイ・ミュージカルへの憧れと現実の葛藤があったことを、今回の展示で知った。私は、台詞と音楽と唄が違和感なく共存するのが井上ひさしの演劇だと思っている。しかしそれは、いわゆるミュージカルとは違う、とも感じていた。でも、何がどう違うのか分からなかった。その答えがここにあった。「ドラマ・ウイズ・ミュージック」という井上ひさし独特の世界は、憧れと現実の葛藤の中で、生まれてきたものだった。今回は文字資料だけでなく、数多くのレコードやCDが展示されている。それは、直接作品に関わるものだけではなく、こんな曲を聴きながら書いていたのか。



読んでいたのか。いや、ただ煙草を片手に開きいつていたのか。頬杖をついている姿、原稿用紙に丁寧な文字を書き込んでいる背中、こちらが恥ずかしくなるくらい優しい笑顔、直接見たことがなく、想像は私たちの勝手なのだ。(和)

追憶はうた「えと共」 「井上ひさしが愛した音楽たち」

展示室の一画が聴衆でいっぱいとなったミニコンサートは、井上作品に関係のある音楽の特集であった。歌ってくださったのは萩原里香さん、ピアノ伴奏は榊原光裕さんである。演奏者と聴き手の距離の近さがとてもいい。1曲目はおなじみ「ひよっこりひよたん島」。50年前、子どもたちをとりこにした同名の人形劇のテーマソングである。萩原さんの豊かな声量に、懐かしいあの頃が思い出された。ガシューインを井上ひさしは生涯聴き続けたという。榊原さんのピアノ演奏「プンディー・イン・ブルー」にはどこか「ひよっこりひよたん島」の曲に共通する部分があるように思われた。演劇「ロマンス」の中で、主人公が家族との団らんを夢見て歌う「ロマンス」は、切なくもくつきりと胸にせまる。「円生と志ん生」の劇中歌「こぼへ折り」は終戦後の大連で起る日本人同士の軋轢を嘆き、言葉をつまづく使えぬ世界に戻して欲しいと神に祈る歌である。リチャード・ロジャースの美しい旋律が、その時代の深い痛みを寄り添う。その他「太鼓たたいて笛ふいて」の劇中歌「ドン！」や、カーテンコールに出演者全員で歌ったという「夢の裂け目」など、既存の曲に井上ひさしが詞を付けたものが歌われた。井上が好んだという服部良一の曲「一杯のコーヒーから」「東京ブギウギ」では、会場から手拍子が出て楽しい雰囲気包まれる。(佐)

見学会・文学散歩を振り返る

- 友の会では夏と秋の2回、見学会を実施してきました。過去10年の行き先をあげてみました。
①あきた文学資料館 (秋田)
②啄木・賢治青春館 (岩手)
③遠野ふるさと村 (岩手)
④野村胡堂あらえびす記念館 (岩手)
⑤運筆堂文庫山形館 (山形)
⑥吉野作造記念館 (宮城)
⑦塩谷島尾記念文学資料館 (福島)
⑧原阿佐緒記念館 (宮城)
⑨日本現代詩歌文学館 (岩手)
⑩石川啄木記念館 (岩手)
⑪芭蕉清風歴史資料館 (山形)
⑫浜田広介記念館 (山形)

施設見学ばかりではありません。その周辺の小さな美術館や建築物をも見るのがあります。そこに関わる専門の方からのお話や、学芸員さんの緻密に調べ上げられた資料と解説などがあります。一人で出かけたときは比べられないほどの知識満載です。知る楽しさが膨らみ、あとでゆっくりまた訪れたいとか、何度でも行ってみたいというきっかけにもなります。震災の年の夏の見学会は見送りました。ただしこの年から秋は近場(仙台周辺)を歩く文学散歩に切り替えました。これまでの6回の実施場所をあげます。①東北大学資料館

- ②只野真葛の墓碑
③晩翠草堂
④榴岡天満宮俳諧碑林
⑤俳人鬼房の小道(バスで塩釜)
⑥スズキヘキの原風景 北目町界隈を歩く
何気なく通り過ぎていたところを意味ある場所として認識させられることに感動です。
歩きつかれてはっと一息のランチ、会員紹介、無駄ではないおしゃべりと楽しいこと尽くめです。時には朗読や歌、演奏などがあり、作品をより深く、作者をより身近に感じることが出来ます。仙台には多くの作家が住んでいます。彼らの作品の中に描かれている場所を巡る散歩はいかがでしょう。ぜひ参加してみてください。(一)

第28回読書会

伊坂ワールドにある優しさ

伊坂幸太郎「イン」

読書会ではこれまでずっと純文学を取り上げてきたが、時には別のものを選んだ作品。著者は独特のスタイルを持った仙台市在住の人気作家であるが、この作者は初めてという人が少なくなかった。連作短編集「チルドレン」の中の一つなので、他の作品も併読することでこの内容が納得できたという声もあった。盲目的の青年長瀬は、彼の目の役割をしてくれる優子と一

緒にデパートの屋上にいる。そこで起こる置き引きを察知する長瀬の、研ぎ澄まされた感覚はみごとで、盗もうとした少女に「お兄さん優しいし、穏やかだし、頭良さそうで恰好いい」と言わせるほどだ。長瀬に対する優子の態度も自然でさりげなく、彼を特別扱いしないところが本当の思いやりなのだと気付かされる。「若い人の浮遊感がよく出ている。文章が柔らかく好感が持てた。色や声というものについて考えさせられた。自分目だけども見えているが、見えない人がなにもかも見ていることに驚く。この作品だけでは視覚障がい者の本当の姿はわからない。タイトルは何を表すのか」などの疑問や感想が出された。重い内容を軽くスマートな形で読者に差し出すという作者特有の世界を覗くことができた会だった。12月14日、10名参加。(佐)



第29回読書会

ちいさな訪問客との喜びと悲しみ

平出隆『猫の客』

小説の舞台は、昭和から平成に代わろうとする頃の東京である。子どものいない三十代半ばの夫婦が借りた家は、私鉄沿線にある広い古風な屋敷の離れである。ある日、この夫婦の元をひそやかに訪れたのは、隣家の飼猫「チビ」だった。人にすり寄る気配のない猫と、猫をそっと見つめる夫婦。その距離はチビが家の中に入ってくるようになって一気に縮んだ。掛け布団の上で眠り、ダンボールの中で小鰻を食べるようになったこの猫にかける夫婦の情愛はただならぬものだった。しかしやがて、夫婦はチビの思いがけない死を知ることになる。濃密であったが故に、夫婦はチビとの暮らしを忘れることができなかった。余りに自分の世界に入り過ぎていて共感できないという意見や、この夫婦は他人の気持ちや推し量れない人間ではないかという指摘もあった。一方、細部の描写が繊細で美しく、猫も神秘的に描かれている。何度も読みたい本だとの感想も出たのは、作者が詩人でもあるからだろうか。2月8日、10名参加。(佐)

次回読書会は4月12日(水)14時 山田詠美「ベッドタイムアイズ」(河出文庫、新潮文庫) ※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。 ☎271-3020